

## 幼児期初期における仲間関係の発達

### —児童館の幼児活動における親子関係から仲間関係への広がりに着目して—

宮崎孝子

(東京家政大学大学院人間生活学総合研究科所属)

キーワード：児童館、幼児活動、2歳児、親子関係、仲間関係

**問題** 子どもは、親をはじめとする周囲の人々と関わり、それを通して社会的なものの見方や行動の仕方を身に着けて、社会の中で自ら生きる力を育てていく(井上, 2001)。幼稚園・保育園の集団の場に移行する前の児童館における親子の幼児活動に焦点を当てた。2歳児は一年間を通してどのようにその対人関係等を発達させていくのかを検討することを目的とする。

**方法** 1) 被調査者：首都圏内A市立B児童センターの幼児活動に参加した親子、毎回10~28組参加、指導員3名 2) 調査時期：2016年4月~2017年3月、毎月1~2回 3) 手続き：4月~7月を前期、9月~12月を中期、1月~3月を後期に分けた。前期は全体を参与観察し、指導員の活動と親子の反応を逐語録化した。中期以降、参加者の了解を得て、全体をビデオ撮影した。撮影後、男児A君と女児Kちゃんを中心に焦点を当て、エピソードを逐語録化した。指導員-親子の関係、親-子どもの関係、子ども同士の関係3つの視点で分析を行った。

**結果と考察** 1) 前期 親子たちは家庭の場から児童館という公共の場へ集まってきた。親子たちは指導員に従って徐々に活動に慣れ、体操・製作・手遊びなどの多様なプログラムと一緒に体験した。指導員は親がこの場が安全な場であることを理解し、わが子の活動を補助し、安全基地になるように働きかけた。子どもは初め親にくっついていて、指導員たちの踊りを見て、模倣して踊るようになり、親から離れて探索するようになった。6月には指導員の指導でペンギンのお面を親子で作り、子どもたちはそのお面を被って皆で踊るようになり、互いを意識するようになった。

2) 中期 9月には指導員は直接子どもたちに働きかけ、やりたい体操のリクエストを募ると、A君は拳手をし、Pちゃんは「ペンギン」と言って意思を示した。指導員は子どもたちの活動や親の活動を集団で、個別に、「すごい」「上手ね」と褒めると、だんだん主体的に参

加するようになってきた。10月には親子のふれ合い遊び「さよならタッチ」の後に、子どもたちは指導員たちの前に来て、タッチやハグを求め、指導員たちとふれ合うようになった。H君が指導員にタッチするのを見て、A君も、Kちゃんも模倣し、次々とタッチを求める子どもたちのタッチの行動が伝染していった。11月には指導員たちが子どもたちに「可愛いペンギンさんは前においで」と呼び掛けると、親たちは前に出るようになりわが子を補助した。A君は初め嫌がっていたが、母に促されて指導員たちの前に集まった。指導員たちと子どもたちの関係ができてくると、親たちは子どもたちを見守って困むようになった。

3) 後期 子どもたちはパラバルーンやゲーム活動の中で更に自分の気持ちを主張するようになった。それを見たり、聞いたりして、気の合う仲間共感や同調を強くした。それとともに、A君は母に反発し、葛藤も生じた。母は子どもの主張を受けとめながらも、距離を取ったり、わが子の活動の補助をし、軌道を修正した。A君は母から距離を取りながらも仲間のB君に近づいたり、また母の元へ戻ろうとする自己調整をしていた。KちゃんはLちゃんと気の合うTちゃんとの三者関係に葛藤したが、母ではなく仲良しのLちゃん「さよならタッチ」をするようになった。親子一体の親子関係は第一反抗期を通して自発性を獲得する中で、仲間との対人関係を広げ、第三者を含む新たな親子関係へと変容していった。最終回にはA君もB君もこの幼児活動を「楽しかった」と指導員たちに伝え、KちゃんもLちゃんも他の子どもたちも皆次々と指導員たちにタッチをしていった。

子どもたちは児童館での幼児活動を通して、指導員たちと信頼関係を持ち、子ども同士互いに影響し合い、親子の関係から指導員たちや他の仲間や他の親たちへと対人関係等を広げていったと考えられる。

(MIYAZAKI Takako)